



—親沢の三番叟—

親沢の三番叟は江戸時代中期の宝暦年間（1750）頃から村のお祭りの娯楽として始められた様で、この頃はあちらこちらの集落で神楽や芝居など催されていたが、親沢集落だけが今日まで当時のまま伝えられて来たのは、親沢独特の徒弟制度によって舞の様式が伝えられて来たからである。

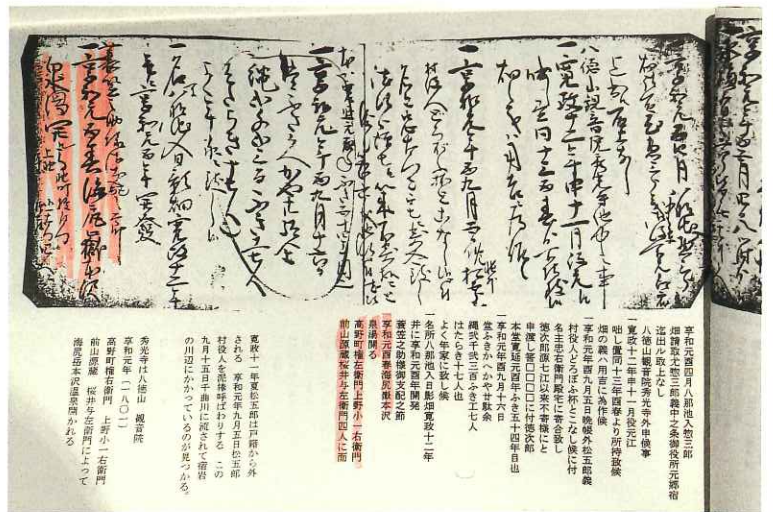
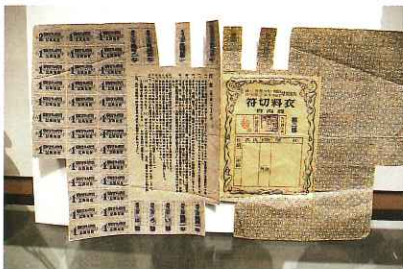
またここに展示してある舞の『かしら』は舞の始まった時、地元の木地師が造ったものといわれており、この様な山村にも高度の芝居に関する知識と技術を持った人達が居た事も知られ、三番叟はこれからも長く伝えて行く努力を重ねて行ける事でしょう。

—大戦中の暮らし—

日支事変が始まって間もない昭和12年8月には敵（中国？）の空襲に備えて防空演習が始まり夜は灯火管制（敵の飛行機に分からないように家の明かりを消す）の練習を始めている。この時早くも旧北牧村内へ軍隊から43名の招集があり、11月2日には戦死者の通知が来ている

昭和15年から地下足袋が配給でないと手に入らなくなり、昭和17年からは、衣類、酒が配給以外では入手出来なくなる。衣類は配給キップで集落に割り当てられた物だけが購入出来たが、それ以外はヤミでしか入らない。

昭和19年からは魚、調味料、日用雑貨に至るまで全部配給となる。



—代吉覚書—

代吉覚え書きは八那池の名主代吉家の2代に渡る覚え書きで寛政6年から、天保10年までの八那池の周辺にあった聞き書きである。渋の湯や本澤温泉の始まり、天保の飢饉時のありさまなどが細かく記されていて、八那池の神社に神楽殿があって舞が行われたなどの記述もあり、川上村から大沢辺まで当時の村の様子も見られる。

—昔の民具—

あんどん-行燈とも書くが此の時代の生活に欠かせない、火打ち石、附木、がんどう、最初に出た頃の懐中電燈など、明かりに関する民具、何処の家にもありながら失われてゆく、はかり、など家財道具も展示されている。機織り機は付属道具も付いて何組も保存されている。その他の民具でここに展示されていない物もある。

